

北部チリ、古代チンチョーロ文化における遺体加工

チンチョーロ人の死の表象形態に関する一考察

宮崎 剛

1. 問題設定

人間は死すべき運命にあるという普遍的事実は、人類学的観点からも当然扱わざるを得ないテーマである。だが、「死ぬ」ということの普遍性は、汎人類的なものとして説明可能なのだろうか。現代のわれわれとは異なった社会において、「死」はどのように意識されたのだろうか。ここでは、古代チンチョーロ (chinchoro) 人の遺体加工から、彼らに特有であったと思われる死の習俗と、死にかかわる観念を考察してみたい。また、遺体加工、ミイラ作成のはじまりを考えると、魂のために肉体を保存したという考えが一般的である。しかし、リヴァース (W.H.R.Rivers) は、「原始的な死の観念は、……我々のものとは異なっている。それも根底的に異なっていると言っても過言ではない。」(1) と述べている。私も同様に考える。現代の霊肉二元論的観念を用いなくとも、ミイラを作成した理由を説明できるのではないだろうか。むしろ、霊肉二元論にとらわれることなく、古代チンチョーロ人の死生観は考察されるべきであることを主張するのが、本稿のねらいである。

2. チンチョーロ文化とその遺体加工

南アンデス地域北辺に位置するチリ北部海岸の砂漠地帯に、約8000年前頃チンチョーロ文化が興り、約5000年間続いた。この文化を担ったのは、漁労採集民であり、入念な遺体加工を行ったことで知られている。過酷な乾燥地帯であるこの地で、彼らは1000km以上の広い海岸地方のオアシスや、川の流域や河口などに暮らしていた。川が海に注ぐアリカ (Arica) では、ペルー寒流がアタカマ (Atacama) 海岸に押し寄せるため、カタクチイワシやニベ、カレイ、アシカ、カニ、また様々な貝類と海藻が豊富であり、乾燥地帯に住む先史時代の彼らにも住みやすい場所であったと考えられる。彼らの文化は、入念な遺体加工を特徴とし、確認されている限りでは、世界史上初めての遺体保存を行った文化である(2)。

チンチョーロに見られるミイラは大きく3タイプに分けられる(3)。最初期のものは「ブラックタイプ」と呼ばれ、紀元前5000年頃から作成され、最も手の込んだ作りである。遺体は解体され、石刃によって皮膚が剥がされ、内臓や筋肉が除かれた。剥がされた皮膚は、再利用するために海水に浸して乾燥を防いだようだ。頭部は頭蓋を開いたあと、その底部にある大後頭孔から脳を掻きだし、わらや炉の灰を詰め込んで頭蓋と下顎を植物繊維のひもで結んだ。脳は目や他の器官と一緒に地中に埋めたか、捨て去ったと考えられる。骨には石炭等の灰が付着し、焦げ跡の残るものが多いことから、肉を取り除いたあと、乾燥させるため主に焼けた石炭にくべられたようだ。関節は、植物繊維のひもでしっかりと結びつけられている。このミイラには、体型を維持するために木の棒が脊椎にそって一本、頭蓋骨から両足首にかけて二本そ

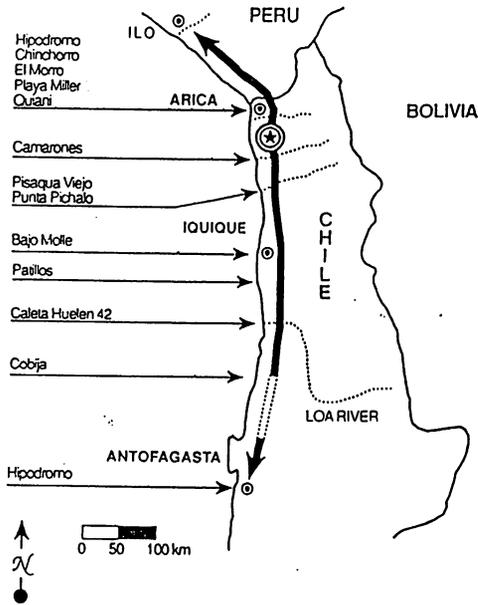


表1 チンチョーロ文化の地理的展開

⊛はミイラ作成がはじまった地域を示す。矢印はその習俗が広がっていった方向を示し、点線部はその地域を通して伝播したと推測される部分である。

Arriaza, Bernardo T. *Beyond death* Smithsonian Institution press. 1995, p.8, Fig. 2.

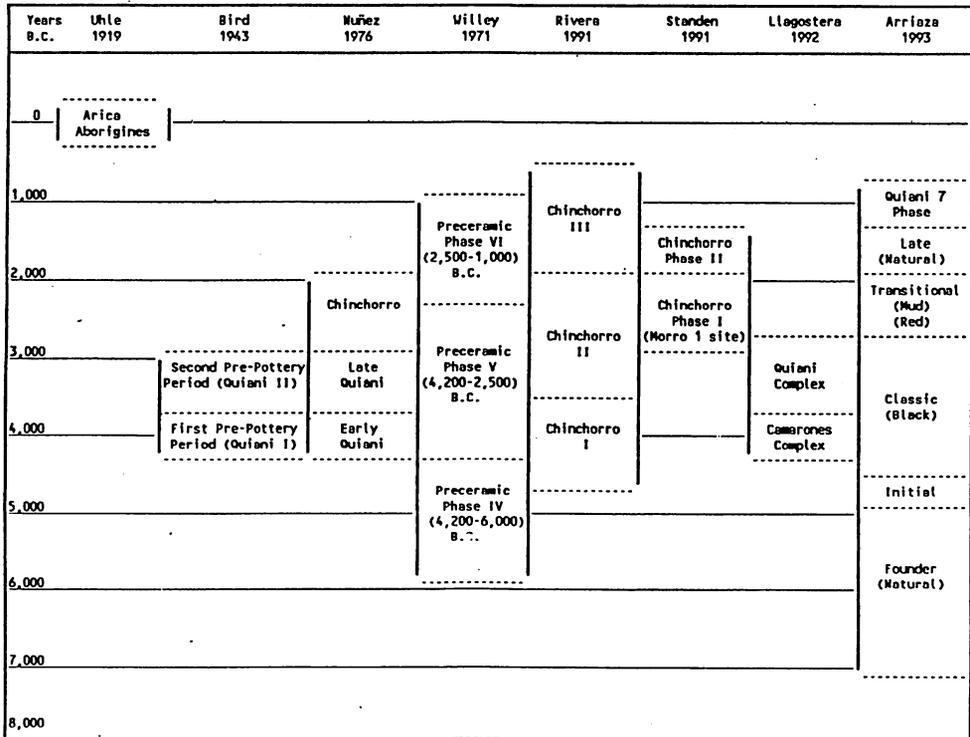


表2 チンチョーロ文化の編年

Arriaza, Bernardo T. *Beyond death* Smithsonian Institution press. 1995, p.8, Fig. 5.

えられている。内蔵を取り除いた体内には、灰と乾燥させた植物を詰め、足や腕の骨は束ねた葦で覆ったのち、灰のペーストで固め、皮膚を戻し、マンガンの顔料を塗って完成させた。顔料のペーストには、アシカや人間の血、鳥の卵、魚などが混ぜられた痕跡があり同じペーストは、表面を覆うほかに性器を形作るのにも使われている。また顔面部の加工にあたっては意図的に表情をつけられたものが多い。マンガンの顔料は、埋葬地で発見されている粗削りの石皿と磨石で細かく砕かれ、水を加えてつくられた。しかし、この顔料は乾燥すると艶がなくなるので、遺体に塗ったのち、木片や小石を使って光沢がでるまで磨き上げられた。手のみは、乾燥後に顔料を塗られているだけで加工は施されていない。

紀元前2800年頃になると、「ブラックタイプ」に代わって「レッドタイプ」が作られるようになる。「ブラックタイプ」との相違点は、顔面を残して身体は赤土によって赤く塗られ、頭部をヘルメットのようにマンガンで覆いカツラのように仕上げたところにある。また、手足が切断されることはなくなり、かわりに身体の各所に切り込みをつけて脳や内臓を取り除き、切開部はサボテンの棘を針にして髪の毛を用いて縫合されている。関節をしっかりと結ぶようなことはせずに、体型を維持するために、体内には何本も棒が入れられた。チンチョーロのミイラは、伸展位のために破損しやすく、ブラック、レッドタイプのミイラには双方とも修復された跡が残っている。彼らのミイラの埋葬は、パラカスのように空洞内に安置するものではなく、砂の中に埋葬するものだったので、埋葬後に破損することは考えにくい。この破損は、遺体を加工後すぐに埋葬せずに、チンチョーロ人の生活圏内の目に見えるところにミイラが一定期間おかれていたため生じたものと考えられる。

「マッドコーティングタイプ」は、紀元前2000年頃から見られるもので、解体や内臓除去が行われていないものが多く、体型維持のために体内に棒が入れられることもなくなった。遺体は最初まず薫製にされ、その後セメント状の泥で頭から爪先まで1cmないし2cmくらいの厚さで塗り固められた。この泥には砂や魚が混ぜられた痕跡がある。この最終期のタイプのミイラは、以前のものとは作成方法が大きく変化していると同時に、取り扱われ方も変化している。ブラックタイプやレッドタイプはその入念な加工が特徴的であるばかりではなく、後述する様々の理由から、加工後も儀礼などに利用されたと考えられるが、マッドコーティングタイプのミイラは、外側が完全に乾く前に埋葬されている。これは、このタイプのミイラが、すべて墓穴の底に張り付いた状態で発見されていることから推測される。このことはのちに詳しく考察するように、マッドコーティングタイプのミイラは、死者との関係を継続しようというよりも、関係を断ち切ろうとする性格を帯びていたと解釈できるのかもしれない。

これら主要3タイプのほかに、ブラック、レッドタイプと併伴するミイラで、すべての子供のものであるが、「バンテージタイプ」と呼ばれるものも認められる。皮膚はなめされて、体内には体型を維持するために棒が入れられている。体はレッドタイプのミイラのようにマンガンで覆われたのち赤く塗られたが、顔は彩色されず黒いままにされ、幅が1cm強のアシカやベリカン、人間の皮によって、頭部、顔面部を残して体全体を包帯状にまかれ、頭には布がかけられた。ただし、バンテージタイプのミイラは、いずれも男女の区別が判然としない。動物や子供の骨を彫って作られた小像が、子供のミイラの上で発見されている。大きさは17cmから

30cmくらいで、赤く塗られたものが多いことから、レッドタイプのミイラとの関連も指摘される(4)が、なぜこれらが副葬されたかについては、まだ明瞭な解釈はえられていない。また、この時代のチンチョーロの人々は、木でも彫像を作っており、これは副葬品の小像と類似している。現在でもアンデスのシャーマンは、コノパと呼ばれる人形を妊婦の異常分娩の際に使用したりすることから、この人形も呪術などに使用された可能性があると言われている(5)。

3. マックス・ウーレの伝播説とその問題点

チンチョーロ文化のミイラの起源については、未だ十分な研究がなされてはいるとは言えず、推測の域を出ない。しかし、これまでは、チンチョーロの遺体のミイラ加工は、アリカ・カマロネス (arica, camarones) 地域で独自に発生し、発達してきたと考えられてきた(6)。チンチョーロ研究の先駆者であるマックス・ウーレ (Max Uhle) は、1900年代初頭、一つの核となる文化から他地域に文化が伝わることで文化変化を説明する伝播主義に立って、チンチョーロ人はペルーから移住してきたと考えた(7)。頭蓋穿孔(8)などにナスカ文化との類似を認め、プロトナスカ文化の南下を想定したのである。起源前2000年以降のマッドコーティングタイプの時期には、アマゾンの鳥の羽でできた頭飾りや、ペルー南海岸が起源と思われる頭蓋穿孔の痕などが見られるミイラが発見されているので、少なくともこの時代にはペルーやアマゾンとの関係を考えてもよい。しかし、チンチョーロの複雑なミイラ作成の起源については、ブラックタイプの初期や、チンチョーロ以前の文化が問題となる。このような初期の時代においては、頭蓋穿孔やアマゾンからの供伴物は見られないので、チンチョーロのミイラ作成はこの地域で独自に発展したと考えるのが自然であろう(9)。

先にチンチョーロの遺体加工の分類と方法について述べたように、この文化で発見された遺体は、自然乾燥によって生じたミイラではなかった。のちのアンデスの諸文化やエジプトなど、世界の他の地域でもミイラ作成は行われており、もちろんチンチョーロのように内蔵除去などの加工が行われたものも多い。しかし、チンチョーロでは、内蔵除去のみならず、皮膚の下の肉までも取り除き、詰め物をして体形を復元するという、まるで剥製のようなミイラが作られた。この文化が展開した乾燥地域においては、これほどまでに入念な加工をしなくとも、遺体は十分に保存できる。それにもかかわらず、彼らがきわめて入念に遺体を加工したのはなぜなのだろうか。それは、遺体を保存するということももちろん重要だったがに違いないが、死体を加工するという過程そのものが特に重要だったからではないかと推測される。往古のチンチョーロ人が、ミイラに持たせた意味を考えると、このような加工の入念さは、すでに指摘した埋葬前の儀礼的開示の可能性とともに、とりわけ問題とすべき事象である。このことについては、後にもう一度考察したい。

4. アンデス他地域における埋葬と遺体加工

マックス・ウーレによって、チンチョーロの遺体加工の起源地として想定された中央アンデス南海岸部は、乾燥しているため自然にミイラができやすく、またミイラが残りやすい環境を

形成している。この地域を含め、アンデスの各地では一般に紀元前2000年から前1500年の間に定住村落が発生し、ある程度生活が安定したことを示している(10)。この時期のアンデス地域では、埋葬は一般に住居の床下を浅く掘って寝姿のまま埋めたり、ごみの山を掘って埋めるぐらいのことしかされておらず、まだ死者を丁寧に葬ることはなかった(11)。しかしペルー南海岸のパロマ地方では、紀元前3000年頃の無土器時代に、すでに死者をよしずでくんで埋葬している例がある(12)。最初に人工的に手の加えられたミイラが見られるのは、チリ北部アタカマ海岸のチンチョーロ文化であるが、ペルーではパラカス・カベルナス文化が最も古い。ペルーの南部海岸では、太平洋に少し突き出たパラカス(Paracas)半島で遺体のミイラ加工が本格化し、パラカス・カベルナス時代、パラカス・ネクロポリス時代、ナスカ時代、ティワナク時代を経て、イカ時代とミイラ作成は変遷していく。マックス・ウーレのいうプロトナスカ人とはパラカス人のことである。

パラカス半島に代表的に見られる墓地は、共同墓地形態をとっており、以下に述べるような基準を元にパラカス時代が設定され、また時期区分もなされている。パラカス時代初期(紀元前8世紀～前5世紀頃)には、地中に3～5mの底部が広がった地下洞を穿って埋葬施設を作るカベルナス(地下洞)式の埋葬が行われ、そこに30～40体の遺体が葬られた。遺体は座位屈葬の形で安置され、頭蓋骨は老若男女を問わず、その大部分が人工変形されており、頭蓋穿孔手術を施されたものもあった。マックス・ウーレは、この頭蓋穿孔の習俗にチンチョーロ文化との関連を見いだしたのである。ただし、このカベルナス式墓地は遺体の安置所的要素が強く、当時の人々がミイラ作成を意図して死者を埋葬したかどうかはわからない。いずれにせよこの地の乾燥した環境は、埋葬された死体を全てミイラ化させることとなった。この埋葬形態は700年以上続いている。

カベルナス式の墓地は、パラカス文化に続くナスカ文化(紀元前4世紀～後5世紀頃)でも作られたが、パラカス時代のものに比べて構造も見かけも格段に良くなっている。参考のためナスカのミイラについて述べてみたい。この形式の墓地の中に納められた遺体の包みはファルドと呼ばれる。これは、パラカス地方やナスカ、アンコン(Ancon)で多く見られるもので、蹲踞姿勢(座位屈葬)の遺体を何枚もの布で覆い包み円錐形や方形にして埋葬しており、内部の遺体は乾燥してミイラ化している。ファルドには擬頭がつけられることもあり、布の代わりにリヤマの皮で包まれたものもあった(13)。ではなぜ遺体は蹲踞姿勢の状態に覆われたのであろうか。これについては、死後の新たな世界での出生のために、この世に出生してきたときと同じ状態にしたというのだとする解釈に加えて、布を巻き終えたときにコンパクトな形になるように蹲踞姿勢にさせたという別の解釈も行われている(14)。

パラカス文化の時代に話を戻すと、カベルナス期に続くパラカス・ネクロポリス期には、カベルナス式の墓地を作るという旧来の習慣は衰退し、住居跡を利用した、さらに大きな墓地が作られるようになる。これは、放棄された住居複合を墓室として使用し、上面を砂で覆って作られたものである。むしろで編んだざる状の籠の上にミイラが安置されており、ミイラには頭蓋変形が施されているが、カベルナス時代のように頭蓋穿孔の施術の痕跡は一般には見られない。また、理由はわかっていないが、ミイラはすべて成年男子である。

パラカス文化に起源をおくナスカ文化の埋葬は、技術的に向上したカベルナス式の墓地形態をとっていたことはすでに述べた通りである。ナスカ文化はとりわけ地上絵で知られているが、これ以外に特徴的なのは、首だけのミイラ、すなわち「戦勝首級」である。これは敵の頭部をミイラ化したもので、後頭部が切り取られ、前頭部と顔面だけが、あたかも仮面のように残されたものである。額の中央には縄を通してぶら下げのための孔があげられている。通常のミイラであれば、うつむかせることによって口が開くことは防げるが、「戦勝首級」の場合は首だけなのでどうしても口は開いてしまう。パラカス時代においても、この種の「戦勝首級」は作られていたが、口はどれも開いていた。しかし、ナスカ時代になると改善されて唇にサボテンの棘を突き刺し口が開かないようにしている。しかも、一本の棘を上から突き刺すともう一本は下から突き刺して、口が開かないように工夫されている。口が開かないようにするという工夫は、ミイラ作成が行われたアンデスの全地域に共通して見られるものだが、追葬を伴わない埋葬や、山岳信仰によってアンデスの山々に捧げられたミイラなどには、開口しているものが多い。ミイラ研究の第一人者であるソニア・ギエンは、山岳部に残されたミイラに開口したものが多く理由として、魂が抜けやすいように故意に口を開けさせたのではないかという可能性を指摘している。チンチョーロでも、すでに記述したように、マッドコーティングタイプを除くミイラでは、ペーストで顔面部を覆う際に、口を開いたような表情をつけた加工も見られるが、山岳部のミイラのように遺体の口そのものが開口しているわけではないので、ギエンと同じ理由を想定できるかどうかについては疑問が残る。また、チンチョーロ人が、死後肉体から霊魂が抜け出るといった観念を持っていたかどうかは定かではない。

アンデス地域の先行諸文化を吸収し、広範囲にわたる帝国を築いたインカのミイラ制作は、スペイン人の記録から見る限り、身体とは異なった存在としての霊魂を認めるという観念に裏打ちされたものであったように思われる。17世紀に、インカに関する諸記録を集大成したベルナベ・コボによると、インカ時代の人々は、人間の魂は不滅であると信じるとともに、善良な人は死後栄光を受けられるが、悪人はその報いを受けて生活しなければならないと考えていたようである(15)。ケチュア語で霊魂のことをカマスカというが、カマスカが生き続けるためには、肉体が保存されていなくてははいけないと当時の人々は考え、ミイラを作成した。この考えによる遺体の保存は古代エジプトのミイラ作成と同様である。インカ帝国滅亡の時に、スペイン人によって捕縛された最後の皇帝アタワルパはキリスト教に改宗している。それは、火刑から絞首刑に減刑してもらえるからであり、その背後には火刑によって肉体がなくなれば、死後の生もなくなってしまうと思ったためであると考えられている(16)。

同様に、後期のチンチョーロのミイラにも、魂の依り代としての肉体の性格を見いだすことも可能であるが、前期のブラックタイプ期における入念な遺体加工を重視するならば、魂のために肉体を保存したと言えるような積極的証拠を欠いている。たとえ霊魂に類した観念があったにせよ、その入念な加工は、加工自体が大切な儀式であり、死者を特殊な形に表象することによって、生者と同一の社会内で生者と対峙しうる存在に仕立て上げることを意図していたのではないかと、いうことを思わせる。霊魂の存在いかに関わらず、チンチョーロ人は、ミイラを作り、これを存在させることによって、死を社会内で目に見え、手で触れることのできる、

いわば物象とすることに大きな意味を見いだしていたのではないだろうかと考えてよいように思われるのである。

5. チンチョーロ人の死に対する態度

生者の死者に対する態度には、基本的に二つの様態が認められる。一つは、死体への恐怖にもとづき、死者との関係を断ち切ろうとするものであり、もう一つは、畏敬や愛情にもとづいて、死後も親縁関係を継続しようとするものである(17)。前者は、火葬や埋葬など、死体の破壊ないし隠蔽といえるような行為に代表され、生前と全く別物、または不可視の状況に死体を移行させることによって、死者と生者の世界を隔離しようとするものである。後者の代表例が、ミイラ作成等、遺体を社会内に保存しようとする処置に見られる。前者においても、死者と生者の精神的関係が完全に絶たれるわけではないが、後者の、遺体保存によって死者と生前と事実上同じ様な関係を継続しようとする仕方よりは、消極的といえる。

チンチョーロ文化の死者に対する態度は、後者の死体保存によって死者との関係を継続しようとするものであった。最も入念に加工が施されたブラックタイプのミイラにおいては、加工後すぐに埋葬されたとは考えがたい。すでに述べたように、遺体には加工後地上に置かれていたと思われる損壊が見られ、何度か修復された痕跡が認められるからである。このことから、ミイラは人々の目に見える形で社会内に置かれていたと考えられるのが自然であろう。これは、遺体が儀礼的な場面で反復的に登場させられていたことを推測させる。遺体を葬礼において一回限りとして取り扱う単葬ではなく、複数回に及ぶ葬儀をとり行う複葬の習俗を、古代チンチョーロ人は有していたのかもしれない。複葬は死生観や死の表象体系とも密接に結びついていることも考えなければならない。

今まで動き話していた人間が、病気や事故などで活動を止める。残された生者は、反応のない朽ちてゆく死者の体を見て、この人間が今までとは違う状態であることを認識する。この状況に恐怖と悲哀という強い否定的情緒が発生したところに、人間の死の観念のはじまりがある(18)。生者が死者に対して抱く情緒的反応には、死者に対する愛惜の念と腐敗していく死体に対する恐怖、嫌悪感という矛盾した情緒の併存があることは、すでに指摘されている(19)。このような矛盾した愛惜の念と死体への恐怖、嫌悪感の均衡関係が、葬送を一面でさまざまな様態で現出させている。それは、葬送儀礼の多様性を生じさせる原因の一つとなるものであろう。チンチョーロ人が遺体を加工し、そして保存する術を発達させたのは、死体が残しやすいという環境もこれに有利な影響を与えたであろうが、火葬、埋葬によって死者と生者の世界に境界をひくものではなく、遺体を加工し可視の状態に死者をとどまらせることによって、死者を生者と同じ社会的な場の中に受容するという基本的な死生観、ないし社会観の展開と無縁ではなかったように思われる。さらに言えば、彼らは、こうして生者と死者の共存する社会を構築し、同時に生と死を、同じ社会的場において区別したのではないかと解釈できよう。

しかし、彼らはなぜあれほどまでに入念な遺体加工を行ったのであろうか。自然状態でも遺体が残しやすい環境の中で彼らが行った必要以上の遺体加工は、エジプトのように靈魂のために朽ちない肉体を用意したというよりも、その加工自体に大きな意味を見いだしていたからで

はないだろうか。今まで感覚があり、ともに生活していた人間が、死を境に全く感覚のない物体へと移行する。そして、生者の関心は、その残された死者の肉体にのみ注がれることになる。そこで彼らは、死者の肉体と生者の肉体の違いを発見する。まわりの人間がどんなに悲しんでも、死者が涙を流すことはなく、また、食べ物を要求することもない。加えて、生者にとっての当然の苦しみである寒さや暑さ、痛みなども、死者の体は超越していることを見いだすのである。チンチョーロ人は、その死者を加工することによって、死を操作的に認識したのではないかと思われる。死体を解体し加工することにより、生者とは異なる死者の感覚の欠如を意識し、死を認識するのである。そして、彼らは死者を生前の状態から別の存在様式へと移行させ、遺体を保存し、崇拜したのではないだろうか。入念な遺体加工を行った理由は、人間が死を契機として「生」に続く別の存在様式へ移行することを明示してくれる表象へと変化させることでもあったのではないかと推察できる。靈魂という観念を彼らが持っていたかどうかは依然として不分明であるが、このように考えるならば、チンチョーロのミイラ制作を、ヨーロッパ的な靈肉二元論に依存しなくとも説明することができよう。ただし、長きにわたって継続した彼らの遺体加工の習俗も、レッドタイプを過渡期に、簡略化へと進んでゆく。チンチョーロ的遺体加工の消滅は他文化の流入時期とも一致する。

6. チンチョーロにおける遺体加工の衰退

紀元前千年紀の間、チリ北部の砂漠地帯に住んでいた人々は、アンデスの高地地方やアンデス東方の熱帯雨林地域からの社会と接触することによって、社会、経済など生活の諸側面において、価値観の変化を体験した。このことは、チリの西部流域地域とペルー南部で発掘されたミイラが、同時期にターバンを巻く習慣を共有していることや、それとともに、織物の技術や冶金術、頭蓋変形の形式なども、ペルー南部の技術や形式と共通点を持つことになったことなどからうかがえる(20)。

織物に見られる図像は、最初は幾何学的なものであったが、アンデス高地社会と接触するようになると、動物や人のような図像も見られるようになった(21)。また、頭のない死体の埋葬や、前述したナスカの「戦勝首級」と同様の戦勝首級の奉納も発掘調査から確認されており、その要素を取り入れた織物も同時に発生した(22)。幻覚剤を使う習慣もみられ、チリ北部の砂漠地帯の墓地からはそれに使われた道具類が見つまっている(23)。この道具類は儀礼用具であり、嗅ぎタバコ用の木製キセルと、そのタバコを準備するための板が多い。これらには、「太陽の門」とよく似たの典型的なティワナクの図像が彫られている。しかし、儀礼的な嗅ぎタバコの伝統は、ティワナク以前からこの地方にあったことが判明しており、ティワナクの土器よりも、むしろこの地方のスタイルの土器が相対的に優勢であることもわかっている。植民地型支配とは必ずしもいえない(24)。ただし、この時代にティワナクの新しい技術を共有したことは、この地域の共同体が新しい社会秩序を樹立したことを示していると解釈できる可能性は高い。

紀元後300年以降のティワナク期になると、チリ北部の先史時代には、ティワナク文化の影響が顕著に見られるようになる。すでにアンデス世界の形成期の文化要素を吸収していたこの

地方の社会は、ティワナク文化の政治、社会、宗教的諸要素も受け入れ、この影響は、ほぼ1000年の間併続することとなる。ティワナクの影響は、チリ北部内のいくつもの小地域ごとに、様々な形をとった。西部流域地域にその影響力は強く、熱帯的環境や豊富な水資源を利用し、定住村落を通じて、その影響は広がっていった。

また、15世紀には、インカの侵入によってチリ北部は完全にその支配下に置かれたが、中南部のマプーチェ族は反抗を続けた。だが、スペイン人の侵攻に対しては、圧倒的な軍事力によって彼らも屈せざるを得ず、アンデスの他の地域と同様キリスト教の強い影響を受けることとなった。遺体もキリスト教の教理に則って、伸展葬で頭を東向きにして埋葬されることとなる。

以上、チンチョーロ文化以後の変遷を見てもわかるように、アンデスの高地社会との接触前後でチンチョーロ文化は大きく変化している。レッドタイプを過渡期として、マッドコーティングタイプの遺体加工へと移行する変化は、他文化との交流による新しい観念の流入によってもたらされたと考えられる。別の要因を求めるとするならば、まだ推測の域を出ないが、加工した遺体の長期にわたる儀礼的利用によって、その遺体が病気の原因となり、チンチョーロ人にとって、祖先の遺体との共存が望ましくない状況になったと考えることもできよう。前述したようにマッドコーティングタイプのミイラは、泥で固められて即座に埋葬されていることから、死者との関係を継続しようというよりも、関係を断ち切ろうとする性格を帯びていると考えられる。チンチョーロ文化における遺体加工の衰退については、今後の課題としたい。

結論

これまで述べてきたように、チンチョーロの遺体加工は、表面を保存し、遺体の外形を保つことに配慮されてきた点に大きな特徴がある。それは、生者が住む同じ社会という場において、死を具象的に認識するための可視性が重視でされたことを示しており、死は抽象的ないし想像的なものとして捉えられていたわけではなかったということも示している。また、入念に遺体加工をすることによる「死」の操作的認識は、死や死者を見えるがままに受容するのではなく、遺体を操作することによって、「生」に続いて起こる「死」という人間の新たな存在様式を創造したのだと解釈することもできる。他の文化のミイラ作成の習俗と同様に、靈魂を想定し再生を願って遺体を加工したと考えることももちろん可能である。しかし、そのような解釈を下すべき積極的な根拠はない。このような恣意的な解釈から離れてチンチョーロのミイラを考えると、ミイラ作成の意味は、遺体を加工することによって、死者と生者を異なった存在として表現し、かつ認識することにあつたとみることが可能であろう。こうして、古代チンチョーロ人は、社会内に死（死者）をとどめて、生者とは別の様態で認識される範疇として死者を社会内に受容したのである。チンチョーロ的生と死の分類の一方法であると考えられる。

註

- (1) リヴァース (W.H.R.Rivers) が *Psychology and Ethnology*. London: Kegan Paul. 1926 の中で原始社会での葬送儀礼の事例研究について述べている。
- (2) カルロス・アルドゥナテ、IV章「先コロンブス期チリの芸術と社会」『古代アンデス美術』(1991岩波書店)中のチンチョーロ文化についての概説を参考した。
- (3) ミイラの分類及びその記述は、Arriaza, Bernardo T. *Beyond death* Smithsonian Institution press. 1995に拠った。
- (4) アリアッサが同書中 p.111、Statuette Mummies の項で指摘する。
- (5) 同書 *Beyond death* p.114による。ラストレス (Juan Lastres) が1951年にアンデスのコノパの医療的性格についての研究を行っており、ニュネス (Nunez) が1965年にコノパとチンチョーロの小像の類似性を指摘。
- (6) チンチョーロ文化におけるミイラ作成起源の研究史については、同書 *Beyond death* 六章、Origin of the Cinchorros and their mummies pp.49-62を参考にした。
- (7) ウーレはプロトナスカ人とチンチョーロ人の形質的特徴に着目し、1917,1919年にその関連を示唆した。
- (8) パラカス地方に顕著に見られる頭蓋変形は、チャビン期の終わりにはすでに行われていた。この伝統はインカ帝国の滅亡まで続き、近年まで山村などではひそかに続いていた。変形は生後まもなく始められ、板で挟んだり、包帯で巻くなどして行われた。統計的に見ると、女性よりも男性に多く頭蓋変形が認められる。頭蓋穿孔とは、医学的または呪術的目的で、生きている人間の頭蓋骨に穴をあけることをいう。世界の他地域でも行われた例があるが、その頻度や規模から見てアンデスが際だっている。現在までにわかっている記録では、7個の穿孔をして生きながらえた例がある。彼らは薬草の知識にも通じていたのでそれらを利用したものと考えられる。
- (9) チンチョーロとアマゾンとの関連については、Rivera, Mario *The Preceramic Chinchorro Mummy Complex of Northern Chile*. In *Tombs for the living: Andean mortuary practices* Dumbarton Oaks Research Library and Collection. 1991 pp.63-66, Possible Origin of The Cinchorro Culture 内での彼の指摘による。
- (10) 関雄二『世界の考古学①アンデスの考古学』同成社1997、加藤泰建・関雄二『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』角川書店1997等を参考した。
- (11) この時代は、墓地や墳墓など埋葬施設としてはっきりと区分できる遺構は少ない。本文中で述べたように、住居の床下に埋めたり、神殿の会談遺構の下に埋葬された遺体が発見されている。
- (12) パロマ地方の埋葬については、Quilter, Jeffrey *Life and death at Paroma: Society and Mortuary practices in a Preceramic Peruvian Village* University of Iowa 1989を参考した。
- (13) リヤマの皮で包まれたものは多いわけではないが、遺体に巻かれる布はてのこんだ織物であり、当時のパラカス人たちにとっても価値あるものである。同様にリヤマの皮も彼らにとって価値あるものであったと考えられる。

- (14) 深作光貞『ミイラ文化史』朝日選書1977、第二章アメリカ・インディアンの項 (pp.59-99) で述べられる。アンデスのチャチャボヤ族のミイラや、インカ時代のミイラもコンパクトで持ち運びやすい形態のものが多い。それらはミイラを儀礼に利用するため実用的な形にされたと考えられるが、パラカスのファルドに関しては、埋葬後儀礼等に利用した形跡は見られないので、遺体を壊れにくく、また前者の、生まれてきたときと同じ姿にしたとする考えの方が整合性が高いのではないか。
- (15) 松本亮三『ペルー黄金展』株式会社求龍堂1998 p.188、アンデスの死生観についての項を参考した。ベルナベ・コボから見るインカ時代の死生観である。当時の死生観については、検証の余地があるが、コボの史料は彼らの死生観を論じる上での欠かせない史料である。
- (16) 死後の生というのは、西欧的世界観を持ったコボ、またわれわれ現代人の思考であるが、それが当然の前提であった当時のアンデス社会において、アタワルパの火刑からの減刑は彼らにとって重要であったと考えられる。
- (17) 生者の死者に対する態度への文化人類学的研究については、大林太良『葬制の起源』角川選書1977「第四章・葬制の諸形式」pp.36-110内でまとめられている事項を参考した。
- (18) Metcalf, Peter and Huntington Richard *Cerebration of Death The Anthropology of Mortuary Ritual* Cambridge University Press 1979 池上良正・川村邦光訳『死の儀礼』葬送習俗の人類学的研究未来社1985の第一章、死に対する情緒的反応 (pp.43-44) による。ここでは、死の持っている潜在力の最も特徴的な一つが、遺族に対して強烈な情緒的衝撃を与えうるものであることが述べられる。
- (19) 前掲書『葬制の起源』 pp.36-110。
- (20) 前掲書『古代アンデス美術』 p.190、『世界の考古学① アンデスの考古学』 p.160。
- (21) 同書『古代アンデス美術』 p.190。
- (22) 同書『古代アンデス美術』 p.190。
- (23) 前掲書『古代アンデス美術』 p.190、『世界の考古学① アンデスの考古学』 p.160内での記述による。
- (24) 同書『世界の考古学① アンデスの考古学』「第6章ティワナクとワリ」(pp.141-187) を参考した。

参考文献

- Arriaza, Bernardo T.
1995 *Beyond death*
Smithsonian Institution press.
- Arriaza, Bernardo T., Arrison, Marvin and Gerszten, Enrique
1988 Maternal Mortality in Pre-Columbian Indians of Arica, Chile
American Journal of Physical Anthropology 77:35-41
- Aufderheid, Arthur C., Munoz, Ivan and Ariazza, Bernardo T.
1993 Seven Chinchorro Mummies and the Prehistory of Nothern Chile
American journal of physical Anthropology 91:189-201
- Isbel, William H.
1997 *Mummies and mortuary monuments*
University of Texas Press
- 内堀基光・山下晋司
1986 『死の人類学』 弘文堂
- 大林太良
1977 『葬制の起源』 角川選書
- 加藤泰建、關雄二
1997 『文明の創造力ー古代アンデスの神殿と社会』 角川書店
- Quilter, Jeffrey
1989 *Life and death at Paroma :Society and Mortuary practices in a Preceramic Peruvian Village*
University of Iowa 1989
- 関雄二
1997 『世界の考古学① アンデスの考古学』 同成社
- Meighan, Clement W and D.L.True
1980 Archaeological investigations in nothern Chile:Tarapaca 2A.
In Prehistoric trails of atacama:archaeology of nothern Chile.
The Regents of the University of California
- Metcalf, Peter and Huntington Richard
1979 *Cerebration of Death The Anthropology of Mortuary Ritual* Cambridge University Press
- 池上良正・川村邦光訳1985 『死の儀礼』 葬送習俗の人類学的研究 未来社
- Rivera, Mrio A.
1984 Altiplano and Tropical Lowland Contacts in Nothern Chile Prehistry:Chinchorro and Alto Ramirez Revisited. In Social and Economic Organization in the Prehispanic Andes.
BAR International Series 194:143-160.Oxford.
- 1991 The Preceramic Chinchorro Mummy Complex of Nothern Chile.
In *Tombs for the living:Andean mortuary practices*
Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- 1991 The prehistory of Nothern Chile:ASynthesis. *Journal of World Prehistory*, Vol.5, No.1